

伊藤明生・小川政弘作 「カンニング」

効果音 (テストで紙をめくる音、鉛筆で書く音。)

郷田修 (小声で)お前、おれにも見せろよ。

西本浩二 (小声で)お前、静かにしろ。

効果音 (紙をめくる音、鉛筆で書く音、続く。)

効果音 (終業のベル)

北見先生 それでは、皆鉛筆を置いて、一番後ろの人は集めてきてください。

清水ひろみ 郷田君、さっき何してたの？

修 何もしてねえよ。お前に関係ねえだろ。

先生 これで、今回の中間試験も終わりです。皆、今日ぐらいは元気に遊んで、ぐっすり睡眠をとるようにしなさい。それでは。

号令 起立、礼！

効果音 (ガヤ)

ナレーション ここは青春中学3年B組。今日は3年になって初めての中間試験が終わったので、皆の顔はいつにも増して輝いていました。進路や成績が気になっている人も、今日ぐらいは五月晴れのもとで思い切り体を動かそうと、胸を膨らませていました。ところが、清水ひろみは一人ぽつねんとして何かを考えているようです。そうです、先ほどの試験中のことが気になっていたのです。クリスチャンであった彼女には、カンニングをそのままに見過ごすことが、どうしても許せなかったのです。そこに近づいてきたのは、親友の森山智江でした。

智江 ひろみ、今日の午後はどうするの？ やっぱりテニスしよう。せっかく中間も終わったし。ひろみ、ひろみったら！ どうしたの？ 何よ、珍しくまじめな顔しちゃってさ。あんたらしくないじゃない。ああ、さっきの試験？ あんなの、みんなできなかつたわよ。あのタヌキは、ほんと意地悪、根性が曲がってるわ。あんなんでよく恥ずかしくないね。あ、ひろみ、どこへ行くの？

ひろみ すぐ帰ってくるから待ってて！

ナレーション そして帰り道――。

智江 ひろみ、どうしたの？

ひろみ なんでもない。大丈夫。

智江 でも、さっき先生とこ行ってきたんでしょ？

ひろみ ううん。

智江 ウソついたらダメよ。何相談してきたの？

ひろみ なんにも。すぐ帰ってきたでしょ。

智江 そう言えばそうね。

ひろみ 先生に言おうと思ったんだけど、言えなかった。

智江 なんだ、やっぱり何かあるんでしょ？

ひろみ 何もない。何もないわよ。

智江 だったらなぜ先生とこ行ったのよ。

ひろみ わたしのことじゃないの。うん……。

智江 あたしとあんたの仲じゃない。言ってよ、ねえ言ってよ。

ひろみ だれにも言わない？

智江 だれにも言わない、絶対！

ひろみ 実はね、わたし…。

智江 あ、分かった。修にホレてんでしょ。

ひろみ バカなこと言わないで。まじめに言おうと思ったのに。

智江 修にホレるのが、ふまじめ？

ひろみ そんなこと言ってないでしょ。ただ、もっとまじめな話なの。

智江 なんなの？

ひろみ さっき、先生とこ行ったのは、告げ口しようと思ったの。でもできなかったわ。

智江 え、告げ口って、なんの告げ口？ まさか、あたしのあのことじゃ…。

ひろみ 違うわ。あんたはわたしの親友よ。そんなことじゃなくって、実は、さっきの試験の時にカンニングしてる人がいたの。

智江 カンニングだって？ そういうのは絶対許せない。あたしみたいにバカでも、できないなりに頑張ってるというのに。一体だれよ？ だれがカンニングしたのよ？ ああアホらし。やっぱりまじめにやってるものが損するようにできてるのかしら。

ひろみ 何バカなこと言ってるの。まじめにやってる人には、すべてを知ってる神様がちゃんと報いてくださるわ。

智江 ひろみと話してるとすぐ「神様、神様」なんだから。でも、だれがやったの？

ひろみ それは言えないわ。

ナレーション そうです、ひろみの見たカンニングの<sup>ぬし</sup>主が、あの郷田修と西本浩二の二人だとは、どうしても言えなかったのです。彼らはひろみとは1年の時から同じクラスで、仲が良かったのですが、受験体制が激しくなるにつれて、ひろみとも遠ざかって次第にグレていく二人に、ひろみは人知れず心を痛めていたのです。次の日も、どうしたらよいか分からず、迷っていた彼女に、ある決心をさせたのは、ホームルームの時に聞いた北見先生の言葉でした。

先生 きょうは、みんなに悲しいこと、というか、僕は非常に残念なんですけど、話さなければなりません。ちょっと僕としては半信半疑なんですけど。実はある人から、「うちのクラスにカンニングをした者がいるらしい」と今日言われたんだが、僕は「うちのクラスに限ってそういうことはない」と言ったんだ。僕はみんなを信頼しているから。でも万が一、君たちの中にそういうことをした者がいるなら、ホームルームが終わってからでもいい、僕のところにこっそり来るように。人間の価値というものは、君たちも知っているように、テストの点数で計れるものじゃない。正々堂々と物事を行うか、行わないかだ。カンニングなどというのは、ひきょう者のすることだ。カンニングして100点取るより、一生懸命頑張って50点取る者のほうがずっといい。いいな、先生は待ってるぞ。

ナレーション そしてホームルーム後、カンニングをした二人のことをどうしようかと迷っていたひろみは、意を決して、帰りかけていた郷田君と西本君に声をかけました。

ひろみ (小声で)郷田君、西本君、ちょっと。

修 ん？ な、なんだよ。

ひろみ ちょっとこっちへいらっしやいよ。

西本 だからなんだよ。おれたちこれから映画に行くんだ。邪魔すんなよな。

ひろみ あんたたち、行ってらっしゃいよ、先生とこ。

修 「行ってこい」って… な、なんだよ。なんでおれたちが？ カンニングなんかしやしねえよ。変なこと言うなよ。

ひろみ 見たのよ、わたし。郷田君が筆箱の底にぎっしり書いたの、西本君に見せてるの。

郷田 お、お前…。そうかよ。そんなにおれたちに恥かかせてえんなら、ひろみ、お前が言ったらいいだろ。それで自分だけいい子になりゃいいじゃねえか。

西本 どうせおれたちや先公の監視的だ。おめえ見てえなキリスト様にかぶれた汚れなきお嬢さんとは出来が違うんだよ。

ひろみ ひどいわ、西本君。どうしてそんなこと言うの？ わたしただ、北見先生がああやってわたしたちのクラスを信頼して言ってくれたのに、その信頼にこたえなきゃいけないって気がしたの。あんたたちのカンニング見てから、わたし、どうしたらいいかずっと考えてきた。どんな理由があるにしても、カンニングって絶対いけないし。

郷田 みんなやってんじゃねえかよ。

ひろみ だからやってもいいってことにはならないでしょ？

西本 おれたちは、ああでもしなきゃ進学どころか、卒業もできねえんだよ！

ひろみ 分かんなかったら、普段の時、どうして聞いてくれないの？ 1年の時はそうやって一緒に勉強したじゃない。今の勉強が進学一本やりで、あそこよりもっと難しくなってることは分かるわ。郷田君たちが目に見えて遅れて、なんだかだんだん取り残されて行くのを見て、わたし、つらかった。でもわたしも、自分の勉強をなんとかこなしていくのが精いっぱい、笑われるかもしれないけど、「二人のこと守ってください」って、神様に祈るばかりだった。

郷田 祈る？ おれたちのことを？

ナレーション 初めて聞いたひろみの言葉に、郷田君と西本君はかすかな衝撃を覚えました。殺伐とした毎日の中で、今は遠くはるかな別の世界に進んでいくような存在に思っていた清水ひろみが、自分のために祈っていたというのです。

ひろみ 郷田君。西本君。正直に言うけど、わたし、やっぱりいけないことはいけないことだと思って、北見先生にあんたたちのこと言いに行こうかと何度も思ったの。でも、できなかった。自分だけがいい子になるのがイヤだったってことももちろんあるけど、それより、今カンニングの事実が分かって、あんたたちが呼ばれても、それが二人にとって本当にいいことなのかって考えたからなの。

郷田 いいわけねえじゃねえか。

ひろみ お願い、聞いて。つまり、なんて言うのかな、先生に怒られて、場合によっては停学処分になって、それであんたたちはまじめになるのかしら？ 立ち直れるのかしら？ そうでなかったら、カンニングっていう悪いことが罰せられたとしても、何か大事なことがそれによって失われてしまうような気がしたの。

郷田 ひろみ、お前…。何を言いたいんだよ？

ナレーション よくは分からないながらも、ひたむきに自分たちを見つめて話すひろみの言葉に、郷田君たちはいつしか引き込まれていました。

ひろみ 郷田君、西本君、自分のやったことが悪いってわかったら、北見先生のところに行って！ そうすることで、本当の自分を取り戻すのよ！ もしどうしても行けなかったら、わたし、行くわ。「わたしがやりました」って。

郷田 ひろみ…。

西本 お前…。

ナレーション ひろみの声は震えていました。その時、彼女の耳には、この間の礼拝の説教の中の聖書の言葉が、力強く迫っていたのです。

聖書の言葉 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。（ペテロの手紙第一 4:8）

ナレーション ひろみは、暗く沈んだ二人の表情の奥に、かすかに感動の色が浮かんでくるのを感じ取っていました。

<完>